

人類学における質的研究の方法論サーベイのまとめ

1 はじめに

本稿の目的は、「先端課題研究 19 質的研究アプローチの再検討」において「分野間比較を通じた質的研究アプローチの再検討」という研究課題の下で筆者がレビューした 10 本の文献の関係を整理することで、質的研究の正当化という観点から、社会（文化）人類学における方法論的な議論の一端を示すことである。

議論を始めるにあたって、人類学において方法論が何を指すのかを場合分けし、本稿で対象とする範囲を確定したい。方法論として第一に挙げられるのは、フィールドワーク（あるいは民族誌的調査）を計画、実施し¹、その中でデータを集めるやり方（参与観察やインタビューなど）に関する議論である²。次に、成果としての民族誌の書き方に関する議論があるだろう。すなわち、説得力のある主張の構築に関する議論である。以上に加えて、データの分析や解釈の仕方、人類学が目指すべき方向に関する議論（機能主義、象徴論、構造主義など）も厳密には方法と切り離すことができないため、広義の方法論と呼びうる。ただし、それらは通常、人類学の理論と呼ばれ学説史の中で扱われている。本稿は、具体的なデータ収集の方法の分類や³、広義の方法論については取り上げておらず、データの説得的な提示の仕方や、フィールドワークや民族誌的データの特性に関する議論に限って取り上げている。

2 方法論の定式化へのためらい

教科書的に言うならば、近代人類学はマリノフスキーによって取り入れられた長期的なフィールドワークを一つの特徴としている。その原型ともいえる方法論は『西太平洋の遠洋航海者』[マリノフスキー 2010]の序論で論じられている。以後、フィールドワークは人類学者としてのキャリアの登竜門となってきた [Marcus and Fischer 1986 (④)]。しかしながら、人類学者のフィールドワークのやり方について個人的な体験が研究室や懇親会などの

¹ ただし、歴史資料を人類学的に再構成する歴史人類学など、必ずしもフィールドワークに基づいていなければ人類学ではないというわけではない。

² 他分野における質的研究の正当化との関係でいえば、フィールドワークは人類学にとって自明であって、フィールドワークという方法自体を用いる根拠が問われることがほとんどない。

³ なお、量的な方法である統計処理から、質的な方法である「参与観察」や「インフォーマルインタビュー」など、あらゆる調査方法を無味乾燥な形で網羅した人類学の方法論の教科書としては、1988年に初版が出た *Research Methods in Anthropology: Qualitative and Quantitative Approaches* が今もなお改訂を重ねている（最新版は第六版 [Bernard 2017]）。ちなみに、日本語では人類学の名を冠したものでは、質的な方法に限られているが、小田 [2010] の『エスノグラフィー入門』や日本文化人類学会が監修した、鏡味他編 [2011] の『フィールドワーカーズ・ハンドブック』などがある。

インフォーマルな場において語られたり、あるいは自伝的な著作の中で具体的な形で論じられたりすることはあっても、体系的な方法論として論じられることも少なく、また、カリキュラムの一部として制度化されることがなかった [Agar 1980 (⑥) :2; Okely 2012 (①)]。その理由として、フィールドワークそのものが持つ調査者の個別性や出来事の一回性という性質がある。すなわち、その一般化を拒む本性によって方法が理論化されてこなかったのである。それに付随する結果として大学の制度との間で人類学は軋轢を抱えている。近年では大学の中で社会科学の方法論の規格化・授業化が求められるようになってきている。英国の文脈では、社会科学における方法論の定式化やカリキュラムにおける方法論の授業の導入は、サッチャー政権下(1979-1990)での新自由主義に基づく学術政策と結びついてきた。比較的有用性を提示しやすい自然科学のみならず、社会科学においても、社会にとっての「有用性」を示すために、短期間で成果を出す研究モデルが称揚されるようになっていった。それに対して、一般に1年から2年あるいはそれ以上の長期間のフィールドワークを実施して、研究対象について予め想定した問いではなく、現地での生活の中から立ち上がる問いを探究することを美德としてきた人類学は、こうした傾向と本質的にそりが合わないということが指摘されている [Okely 2012 (①)]。

3 方法論の定式化の試み

人類学の内部でも、民族誌的記述の信頼性の担保を目的とした方法論の定式化ないし規格化⁴は他の学問分野とも連動しながら試みられてきた。ただし、それは常に定式化を拒むようなフィールドワークの特性との緊張関係として議論されてきたともいえる。英語圏で初期に人類学者向けに書かれたフィールドワークの方法論の書籍として、Agar [1980] (⑥) によるものがある⁵。そこでは、社会学で提唱された質的研究の体系的方法論である、「グラウンデッド・セオリー」[cf. Glaser and Strauss 1967]における「理論的飽和」といった概念を参照しながら、著者のフィールドでの具体的な事例を交えて民族誌における主張の信頼性を高めるための方法が議論されている。とはいえ、この本の中で注目に値することは、フィールドワークの方法にはそもそも定式化になじまない部分があるということAgar自身が至る所で書いていることであろう。

量的調査に準じた形で質的調査の方法を定式化することによって信頼性の問題を解決し

⁴ 第二次世界大戦後に実証主義的なスタイルが広がる中で、フィールドワークを語るために形式主義者の特殊用語 (e.g. 参与観察、非公式インタビューといった方法論のカテゴリー化) が用いられるようになった、という記述に対応している [Marcus and Fischer 1986 (④)]。

⁵ これより古いもので、人類学者がフィールドを選定し調査を行っていく過程について書かれたものとしてウィリアムズの本 [Williams 1967] がある。実松 [2017] は、自身のフィールド経験とも関連付けながら、ウィリアムズの提示したフィールドワークの見取り図を中心としつつ後に質的調査法としてカテゴリー化された方法との関係を包括的に論じている。

ようと試みるものとしては、以下に挙げるものがある。Fife [2020] (②) は、自分自身の人類学者としてのキャリアを積み上げる中で、信頼性の問題について一貫して関心を抱いていたという。そして、パプアニューギニアの教育制度を調査する中で自分自身が作り出した、観察される特定の振る舞いをコード化してそれを計上していくという方法を解説している。また、リサーチ・デザインについて論じた、Johnson & Hruschka [2014] (③) は、人類学の研究においても、量的調査や実験室における実験に準じた調査を部分的に組み合わせた様々な研究を紹介している。そして、そこで研究の信頼性を高めるための要素についても論じている。

4 定式化を拒む民族誌的データの特性

一方で、人類学において通常想定されてきたフィールドワークとは、特定の対象についての調査というよりも、まずは調査者にとっての異文化での生活そのものであり、その中で研究対象を確定すること自体を含みうるものである。調査者はフィールドの人々とのやり取りを通じて、予め持っていた先入観を修正していく。その意味で、フィールドワークは調査者自身の価値観の変容を伴うものである。このようなフィールドワークの性質を考慮するならば、だれもが同様の調査を行えば同様の結論に達するということを前提とした質的調査法の定式化からは逃れるようなフィールドワークの在り方の探究へとつながっていく。

こうした角度からの方法論の研究として次のようなものがある。Vartabedian [2015] (⑤) は、ブラジルのトラヴェスティ (*travesti*) と呼ばれる、女装した性労働従事者についての研究において、自身の調査者としての身体が果たした役割について考察している。フィールドワークにおいて調査者自身の個別性が調査自体を構成することは避けられない。著者はそれを逆手にとって、人類学の方法の中で、その身体的特徴が調査においてどのような役割を果たしたのかについて反省的な考察を行うことを提案する。例えば、控えめな外見の女性と自己規定する著者の身体は、調査対象の人々がもつ「女性らしさ」の基準に照らせば称賛されるものではなかった。そのため、著者は調査対象者の人々から時にかかわれることがあったという。しかし、そうしたやり取りが調査対象の人々とのラポールの形成に寄与し、さらには彼らが目指す「女性らしさ」という価値観の内実を探究するという研究上の問いへとつながっていくこととなったと論じている。その意味で、調査者の身体的な特徴は調査を制限すると同時に調査の可能性の条件でもあるのだ。

また、Heider [2015] (⑦) は、同一対象を扱う二つの民族誌で見解が異なるときに、どちらか一方が正しく、もう一方が間違っているとする単純な見方を退け、両者の相違の含意について考察している。著者は調査者の特性や調査方法の相違による見解の分岐について場合分けして考察している。まず同じ現象を異なる観点から見るという場合が考えられる。同じフィールドであっても、調査者が訪れた時期が異なっていたり、同じ文化の異なる部分を見ていたり、部分の切り取り方が異なることによって見解の相違が生まれる。こうした場合には、異なる見解を足し合わせていけば統合的な真実に到達することが想定されている。そ

これからさらに Heider はより深い相違の場合にも言及する。調査者の文化的・個人的な背景や、さらには個人的な特徴によって観察の際の強調点も変わり、また、そうした条件の違いが調査の遂行自体にも影響を与えうるという点である。したがって、民族誌的データをより正確に把握するためには、調査者自身の特性についても反省的になることが必要となる⁶。またそうすることで、民族誌の見解に相違が生じた時に、それをも分析の対象とすることで、調査者自身の偏見の原因や文化的背景の理解にもつなげることができる⁷と論じている。

さらに、少し別の観点から民族誌的データの特性について考察したものがある。Pool [2017] (⑧) は民族誌データを検証するためのアーカイブ化という考え方についてその可能性と限界について考察している。研究データを蓄積し、他の研究者もアクセス可能にすることで、研究の検証が容易になり科学や研究の信頼性に貢献するという考え方は一般的にある。他方、フィールドワークにおいて集まるデータは「ハードで客観的」な書類や人工物から、「ソフトで主観的」な記憶や経験まで多岐に渡る。いずれにしてもそこに調査者の解釈が含まれているのだという⁷。そのため、単にデータをアーカイブ化するだけでは理解に不都合が生じる(例えば、詳細のない写真)。また、Pool はインタビューの音声データそのものとそれを書き起こしたものの違いにも言及している。通常、(一部の倫理綱領でも)両者の持つ意味は同じものとされるが、起こした文字を読むと、その場にいたときには発話者すらも気づいていなかったことが明らかになることがあるという。したがって、取得したデータは、現場で立ち現れた現象そのものとは既に異なっていると Pool は考えている。以上の3つの文献が示しているのは、フィールドワークという方法には、調査者の個別性や出来事の一回性がまとりついているために、方法の定式化を拒む性質があるということである。

このような性質は一般化や規則の導出を目指す科学観からは遠く離れているために、人類学は無用な営みのように外部からは見えるかもしれない。しかし一方で、他の学問分野に対して人類学が果たしうる役割も議論されている。Fricke [2003] (⑨) は、人類学による人口統計学への貢献の可能性を議論する中で、ある母集団において因果関係を見出す際に、対象の人々自身の意味を探究する必要があると述べている。例えば、ある集団において教育水準の向上と晩婚化が相関していると示されたとしても、それを「近代化」理論を示す事例として扱うのではなく、当事者が教育や結婚にどのような意味付けをしているのかを読み解いていくことで因果関係をより詳細に理解することが目指される。ここでは想定されていたカテゴリーや理論、概念が相対化されるということということが起きうる。このことは一般的に、質的研究が量的研究の仮説検証に対して果たす補完的な役割として議論されてきたことと対応するだろう。

⁶ 同様のことをストラザーンは『部分的つながり』の中で述べている。「人類学は、20世紀後半にはすでに、多元的な世界についての見方からポスト多元的と呼べるような見方へと移行している」[ストラザーン 2015: 26]。

⁷ このことはすでにギアーツが「厚い記述」の中で論じている [ギアーツ 1987]。

5 実践との関係

以上から、人類学の内部における方法論的な議論の中に、質的調査として定式化を目指す極と、フィールドワーク自体がもつ定式化を拒む特性に関する考察の極という二つの軸を設定することができるだろう⁸。フィールドワークの特性に関する考察は、そもそも人類学のフィールドワーク自体が実践を含むこと、すなわち、調査者の存在自体が調査対象である社会の構成に関与している、ということとも関係している。そして、むしろ世界との実践的ななかかわりを前提としたうえで人類学のあり方を考察する方向へもつながっていく。人類学の下位分野である公共人類学は、学問分野やアカデミズムの境界を越えて人類学が社会に影響を及ぼすことについて批判的に探究していく。Eriksen [2014] (⑩)によれば、人類学は歴史的にそもそも探検や植民地化と結びついていたり、「未開社会」への偏見を取り除く啓蒙活動に従事してきたりしてきたという意味で公共的であった。現在では調査対象の人々のコミュニティや社会問題に市民的に関与するという研究も生まれている。通常、こうした研究は「科学的で客観的な」基礎研究よりも一段下に見られている。しかし、特定の目的に導かれた問いであってもその条件を問い、カテゴリーを再考するなどすることで、やり方によっては、人類学全体にとっても意義のある研究になると Eriksen は議論している。

6 サーベイのまとめ

これまで検討してきたように、人類学の内部では社会学などとも連動しながら質的調査という形で方法を定式化しようとする流れがある。また、同時にそうした定式化になじまないフィールドワークの性質も議論されてきた。さらに、実践を積極的に肯定しつつもそれに批判的アプローチする公共人類学という下位分野をも人類学は生み出してきた。フィールドワークという、調査者の個別性や出来事の一回性が不可避である方法を根本に据える人類学はこうした特徴に反省的になりながら発展してきたのである。本サーベイの目的はそうした人類学の在り方を他の分野に向けて示すことであった。それは、質的調査の分野間比較という本プロジェクトの目的への貢献でもあり、公共人類学の実践でもあるといえよう。

参考文献

レジュメを作成した文献

- ① Okely, Judith 2012 *Anthropological Practice: Fieldwork and the Ethnographic Method*. Berg Publishers.

⁸ マリリン・ストラザーンは、学問分野内部の下位分野への分割が学問分野同士の差異化と対応しているためにフラクタルの様な構造になっていることを指摘している。例えば、自然科学と人文学を分けるものは、社会科学の中にも、人類学の中にも、さらに人類学の下位分野の中にも見いだされるという [Strathern 2019: 89-91]。これは量的調査と質的調査の対立にも当てはまり、また様々なスケールで見いだされるだろう。実際、社会政策や教育社会学の分野のサーベイにおいても、人類学を引き合いに出しながら、質的調査を正当化しようと試みる議論がある (教育社会学①、社会政策⑧)。

- ② Fife, Wayne 2020 Chap.1 The Reliability Issue. In *Counting as a Qualitative Method: Grappling with the Reliability Issue in Ethnographic Research*. Palgrave. pp. 1–21.
- ③ Johnson, Jeffrey & Daniel Hruschka 2014 ch.3 Research design and research strategies. In Russell Bernard and Clarence Gravlee (eds.), *Handbook of Methods in Cultural Anthropology*. Thousand Oaks: Rowman & Littlefield Publishers, pp.97–129.
- ④ Marcus, George and Michael Fischer 1986 *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*. The University of Chicago Press (=マーカス、ジョージ、フィッシャー、マイケル『文化批判としての人類学—人間科学における実験的試み』永渕康之(訳)、紀伊國屋書店).
- ⑤ Vartabedian, Julieta 2015 Towards a Carnal Anthropology: Reflections of an Imperfect Anthropologist. *Qualitative research* 15(5): 568–582.
- ⑥ Agar, Michael 1980 *The Professional Stranger: An Informal Introduction to Ethnography*. Academic Press.
- ⑦ Heider, Karl 2015 The Rashomon Effect: When Ethnographers Disagree. *American Anthropologist* 90(1): 73–81.
- ⑧ Pool, Robert 2017 The Verification of Ethnographic Data. *Ethnography* 18(3): 281–286.
- ⑨ Fricke, Tom 2003 Culture and Causality: An Anthropological Comment. *Population and Development Review* 29(3): 470–479.
- ⑩ Eriksen, Thomas 2014 ch.23 Public Anthropology. In Russell Bernard and Clarence Gravlee (eds.), *Handbook of Methods in Cultural Anthropology*, pp. 719–734.

それ以外の文献

Bernard, Russell 2017 *Research Methods in Anthropology: Qualitative and Quantitative Approaches*. Rowman & Littlefield Pub Inc.

Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Cultures*. Basic Books (=ギアーツ、クリフォード 1987 『文化の解釈学〈1〉』、『文化の解釈学〈2〉』吉田禎吾、中牧弘允、柳川啓一、板橋作美(訳) 岩波書店).

鏡味治也、関根康正、橋本和也、森山工(編) 2011 『フィールドワーカーズ・ハンドブック』、世界思想社。

小田博志 2010 『エスノグラフィー入門：<現場>を質的研究する』、春秋社。

実松克義 2017 「シンポジウム寄稿論文 フィールドワーク：人類学の方法論とその課題」『国際行動学研究』12:31–71。

Strathern, Marilyn 2004 *Partial Connections, Updated Edition*, Altamira Press (=ストラザーン、マリリン 2015 『部分的つながり』大杉高司、浜田明範、田口陽子、丹羽充里見龍樹(訳)、水声社).

Strathern, Marilyn 2019 *Relations: An Anthropological Account*. Duke University Press.

Williams, Thomas Rhys 1967 *Field Methods in the Study of Culture*. Holt, Rinehart and Winston, Inc.